

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

お守り

熊本県 熊本市立清水中学校 二学年

竹田 結菜

「ゴオーツ」という地鳴りと共に大地震は突然、私たちの所にやって来た。揺れがひどく身動きも出来ず、その場にしゃがみ込むだけで精一杯だった。テレビや携帯電話からは、緊急地震速報の音が鳴り響き、さらに恐怖をあおった。その上、停電も重なり真っ暗闇の中、家族三人で身を寄せ合った。人生で初めて、死を身近に感じた瞬間だった。一週間ぐらいはスーパ―やコンビニから水や食料がほとんど無くなり、空腹を覚える程だった。今思えば、昨日までの平凡な日常が当たり前ではなかったのだと思ひ知らされた。

『熊本では大地震は起こらない』と誰もが思っていた。しかし、実際に震度7の大地震が二回も起こってしまった。それまでは「備えあれば憂いなし」という言葉は知っていたが、今回、このような事を経験しなければ再確認する事はまず無かった。余震が頻繁に起き、一カ月もの間学校も休みが続いた。母と過ごす時間が増えたある日、「もし、今回の地震でケガして入院したら大変だったよね。」

と私が言うとは母は、

「大丈夫だよ。家族全員、保険に入っているから。」
と言った。

「えっ、そうだったんだ。知らなかった。」

と私がびっくりした顔を見ると、

「保険に入ると、お守りになるんだよ。」

と母。

「何それ。」

と私が聞き返すと、

「普段は必要じゃないけど、もしもの時の事を考えて保険に入っておくと、いざという時が来てもお守りのように安心出来るって事だよ。」
と話してくれた。

始めは、軽く聞いていた話だったが、今は、ほっとしている自分がある事に気付いた。それまでは当たり前だと思っていた考えが一瞬で変わってしまう程の出来事と遭遇してしまう恐怖を知ったからだ。このような経験をした今なら「保険はお守り」という母の言葉

第55回中学生作文コンクール

に納得出来た。

人は誰しも、恐怖や死を感じてしまうと心の拠り所を求めてしまう。家族やペットなど、さまざまである。私も震災当初は、家族を心の支えとしていたが、その後、現実に生活していかなければならぬ事を実感した。水道が出なければ水を、壊れた電化製品があれば新しいものを買わなければならない。つまり、生活していく為には、お金もとても大切であるという事だ。

そのお金を保障してくれる大切なお守りが保険というわけだ。保険と一言で言っても、さまざまな種類があり、年齢や家族構成によっても必要性が異なる。

この先一人立ちをしたら、そのつど自分に合っているか見直しをして、いざという時の大切なお守りとして保険を活用出来るようにしておきたいと私は思った。